

保育内容「環境」における野菜栽培活動の教育的効果

位田かづ代

岐阜女子大学文化創造学部

(2017年9月25日受理)

Educational Effects of Cultivating Vegetables as part of the Teaching about “Environment in Schools” Subject

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu Japan (〒501-2592)

INDEN Kazuyo

(Received September 25, 2017)

要 旨

本研究では、保育内容「環境」受講の女子大学生の野菜栽培活動に関する教育的効果を明らかにするために、野菜栽培活動開始前の質問紙調査と活動後の振り返りレポート記述内容を検討した。栽培活動開始前は継続栽培への決意を述べていたが、活動開始後は授業外での継続栽培に苦勞し、栽培知識の不足も重なり反省の記述が多くなる。しかし、苦勞したことで野菜の成長に感動し愛着が生まれ、栽培の楽しみへと変化する。その結果、栽培は子育てと同じであるという実感や、保育者を目指す学生の栽培体験の必要性和子どもの栽培体験の重要性に気づき、将来保育者となる自分の在り方や栽培体験の必要性を認識する教育的効果があることが示された。

〈キーワード〉 保育内容「環境」 野菜栽培活動 栽培体験 教育的効果

I. はじめに

幼稚園教育要領及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、5領域の「環境」の内容に「(5)身近な動植物に親しみをも(持)って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」という項目がある。保育所保育指針においても、内容に「⑦身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」という項目がある。こ

れらは、いずれも動植物との関わりを通して、子どもに生きている物への温かな感情の芽生えや、生命を大切にするという心を育てることが求められている。実際、筆者が保育者として勤務していた保育園や幼稚園においても、子どもと一緒に野菜栽培を行っていた。年度により栽培作物は変わるが、年間計画に盛り込み、収穫したものを調理した結果、嫌いな野菜が食べられるようになった子どもがいたことを経験している。

先行研究で木田ら(2012)は、幼稚園での

栽培活動の頻度の多さが、食べ物に興味・関心を示すことや、嫌いなものでも頑張って食べる子が増加したことを報告している。また、週1回以上の栽培活動や保護者の参加により、食育効果が高まる可能性を示している。村田(2007)は、保育園において栽培と野菜を使った染色体験実践を報告している。子どもたちが畑の土づくりから、苗を植えて育て、収穫したものを給食のメニューに加えるというだけでなく、皮を染料とした染め物を祖父母にプレゼントしたという一連の活動実践である。この体験により、子どもの好奇心を刺激し、一方的に与えられたもので行ったのでは得難い感動があったと報告している。このように、保育現場での野菜栽培は、子どもたちに有効であることが明らかになっている。

一方で細田ら(2008)は、保育職を目指す学生の自然環境に関する意識調査を行った結果、自然環境に触れたり、自然の中での遊びを経験してきている学生は「多いとはいえない」ことを明らかにしている。ここから、養成校の指導の方向として自然物を身近に感じやすい植物栽培を取り入れ、「育てる」経験をさせる必要性を述べている。

草野(2011)は、子どもの自然との関わりをよりよく促すには、まず保育者自身が自然体験を豊富に持つことが重要であると述べている。そのためには保育者を目指す学生の養成課程において、学生が自然体験を積むことのできる授業を導入する必要性を示している。草野は、養成課程における自然体験授業が学生にどのような効果を及ぼしたのか、「保育内容の指導法・環境」での野菜栽培実践を中心とした授業体験について学生への質問紙調査から検討を行っている。授業のなかで、学生が自然体験の機会を多く持てるように、周辺の自然観察や採集と共に野菜栽培を取り入れ、授業前と授業後の意識の変化から効果

を分析した結果、体験学習は栽培や自然体験への親和性を高め、ひいては保育者としての資質を高める効果があることを示している。

筆者の勤務していた園では、野菜の栽培活動をするにあたり、指導すべき保育者に栽培経験がなく、子どもに体験させる前段階で、まず職員同士の栽培方法確認などの時間を要することがあった。保育者の栽培経験不足は、保育現場での野菜栽培の有効性と相反している。これらのことから、本研究では、保育者を目指す学生が野菜栽培活動を体験することによりどのような教育的効果があるのかを検討することを目的とする。

今回は、野菜栽培を15回の授業時間内ではなく、授業時間外の課題学習として栽培実践を行い、栽培前の学生へのアンケート調査と栽培後の「野菜栽培から学んだこと」の振り返りレポート分析から検討する。

II. 方法

1. 保育内容環境課題「野菜を育てよう」概要

201X年前期に保育内容「環境」で実施した。受講者は、初等教育学専攻学校教育専修および子ども発達専修の2年生、文化創造学専攻と生活科学専攻の2年生で、保育士・幼稚園教諭免許取得希望の学生27名である。

保育内容「環境」の第1回ガイダンスで野菜栽培活動の説明を行う。課題は「野菜を育てよう」である。栽培野菜は、「保育現場で子どもと一緒に栽培活動がしやすい野菜」とした。

5月の大型連休中に鉢やプランターなど、野菜栽培に必要なものを用意し植付ける。植付けと同時に、観察日誌に記録を取る。栽培野菜には必ず名前をつけ、毎日呼びかけること、成長を写真に残すこととした。5月連休

後から観察が開始できるように、各自で栽培計画を立てる。さらに、授業内で栽培活動を実施するのではなく、各自が授業外で自宅や下宿で栽培活動を行い、観察記録の記入を義務づけた。ただし、栽培活動の途中経過報告は、観察日誌を用いて授業内に行うこととした。

(1) 質問紙調査

「野菜を育てよう」アンケート調査

以下の質問項目で回答を求めた。

質問1. 保育内容環境の課題「野菜を育てよう」についてお聞きます。課題についてどのような感想を持ちましたか。正直に答えて下さい（複数回答可）。

（面白そう・やってみたかった、など課題に対してよい感想6項目、仕方がない・面倒・できればやりたくないなどマイナスの感想6項目）

質問2. あなたは今までに、野菜を育てたことがありますか（はい・いいえの2択）

①「はい」と回答した人にお聞きます。誰とどこで野菜を育てたのですか（複数回答可）。（ア：両親や祖父母と一緒に（手伝いもあり）で、野菜を育てたことがある、など5項目）

②「いいえ」と回答した人にお聞きます（複数回答可）（ア：家に畑等なかったから育てたことはない、など5項目）

質問3. 保育現場では子どもたちが野菜を収穫し、調理して食しているところがあります。知っていましたか（はい・いいえの2択）

①「はい」と回答した人にお聞きます。どのような方法で知りましたか、複数回答可。

（ア：テレビや雑誌で見たり聞いたりしたことがある、など5項目）

②「いいえ」と回答した人に理由をお聞きます（聞いたことも見たこともない、など3項目）

質問4. 植えた野菜を今からどのように関わろうと思っていますか。決意を述べて下さい（自由記述）

(2) 調査対象と実施手続き

保育内容「環境」の受講者全員を対象に、第4回授業後（5月）に実施した。有効回答数は27名（有効回答率100%）であった。

実施前に、アンケートの趣旨、協力は自由意思によるもので個人は特定されないこと、無記名式の調査であること、同意の有無や回答内容が成績評価に影響するものではない旨、口頭で説明し同意を得た。

2. 野菜栽培活動後の振り返りレポート

5月にアンケート調査を実施した学生27名を対象とし、前期に取り組んだ野菜栽培活動の振り返りとして、「野菜栽培を通して学んだこと」を、前期試験終了後（8月）に字数を指定せず自由記述で求めた。

レポート提出後、学生へは研究内容を口頭で説明した。研究資料として用いる承諾を得た後、データはパソコン処理し、個人名は特定できないようにしてプライバシーの保護を行った。

分析方法は、内容分析技法を用い、次の手順により分析を行った。①レポートをパソコンによりテキスト化した。②レポート内容を精読し1文章に1つの意味が含まれるように抽出し1記録単位とした。③意味内容の類似性に従って記述内容を分類し、意味内容を抽象化した表現でサブカテゴリーとして命名した。同様の操作によりカテゴリーとした。

Ⅲ. 結果と考察

1. アンケートの質問項目別結果

質問1.「野菜を育てよう」課題に対する感想

課題に対してよい感想として、①面白そう13名（48.1%）、②楽しそう11名（40.7%）、

③やってみたかった3名(11.1%), ④やりがいを感じる3名(11.1%), ⑤将来の為に役立つ5名(19%), ⑥その他①~⑤以外の良い感想3名(11%)であった。

課題に対するマイナスの感想として、⑦仕方がない0名, ⑧面倒7名(26%), ⑨できればやりたくない0名, ⑩費用の工面が大変1名(4%), ⑪不安4名(15%), ⑫その他⑦~⑪以外のマイナスの感想2名(7.4%)であった(図1)。

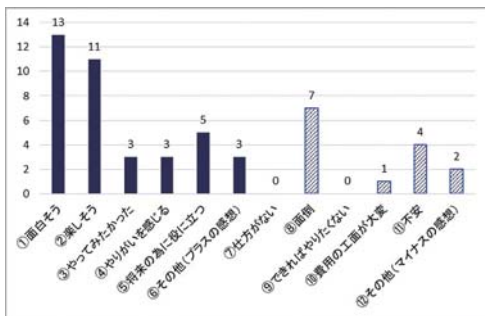


図1 野菜栽培課題に対する感想

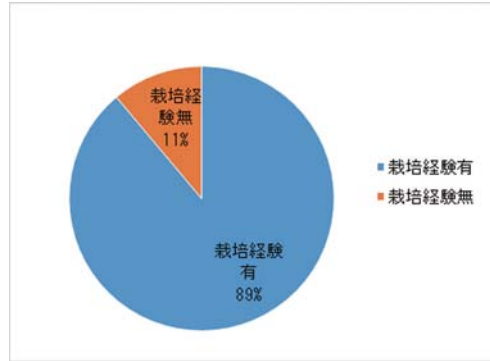


図2 過去の栽培経験の有無

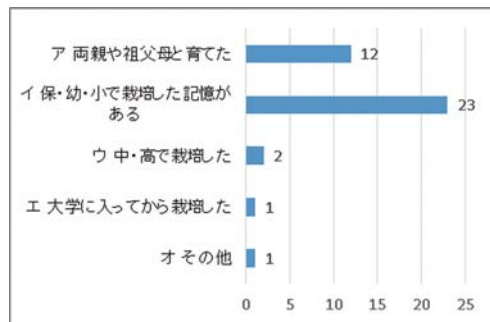


図3 過去の栽培経験

質問2. これまでの野菜栽培経験(複数回答)
過去の栽培経験を聞いたところ、経験あり24名(89%), 経験なし3名(11%)で、9割近くの学生は栽培経験があった(図2)。

誰とどこで栽培したのかは、「保・幼・小で栽培した記憶がある」23名(85%), 「両親や祖父母と育てた」12名(44%), 「中・高で栽培した」2名(7%), 大学に入ってから栽培した1名, その他1名であった(図3)。保育現場や小学校での栽培経験は家族との栽培経験の約2倍になっており、野菜栽培経験なしの3名は、自宅に畑がなく栽培する時間がなかったと回答している。

質問3. 保育現場での野菜栽培および調理実施を知っているか。

保育現場での野菜栽培や調理実施を知っている学生は24名(89%), 知らない3名(11%)

であった。知らないと答えた3名は、「聞いたことも見たこともない」2名、「園で野菜を育てた経験がないから」1名という回答であった。2名が保育現場で野菜を収穫していることを聞いたことも見たこともなく、1名は園で野菜を育てなかったため知らないなど、通っていた園の環境が大きく影響していることがわかる。

保育現場での野菜栽培や調理実施を知った方法を聞いたところ、「自分が通っていた園で収穫したことがある」18名(67%), 「テレビや雑誌」7名(26%), 「大学の講義」2名, 「家族・先輩・友人」2名であった(図4)。

7割弱の学生は通っていた保育園や幼稚園での栽培経験がある。

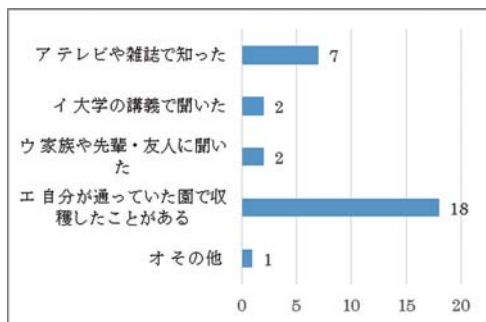


図4 過去の栽培経験の有無

質問4. 植えた野菜を今からどのように関わろうと思っているか、決意を自由記述で求めた(表1)。

表1 野菜との関わり決意

内容	人数
継続栽培の決意	14
愛情をもって栽培	12
収穫への意欲	7
食への感謝(命をいただく)	3
みんなで栽培	1
栽培は楽しみ(希望課題)	2
調理意欲、家族友人に提供	2
自己の性格反省	1
栽培不安	1
食費軽減	1

植えた野菜とどのように関わっていくのかを聞いたところ、継続して栽培する(14名)という決意やわが子のように愛情をもって大切に育てる(12名)ことを決意している学生は多い。また、継続栽培や収穫の決意をするものの、長続きしない自分の性格や野菜を育てたことがない不安を正直に述べている学生もいる。

2. アンケート結果の考察

学生の栽培課題に対しての取り組みは良好である。これは、9割近くが今までに栽培経験があることが大きく影響していると考えら

れる。ただ、栽培経験はあるものの保・幼・小で栽培した記憶がある程度で、大学入学までに学校教育以外に栽培経験はほとんどない。幼い時の栽培経験は、知識として定着しているわけではなく学生の栽培自信には繋がらず、枯らしてしまわないかという不安は感じている。

自宅に畑がないなど栽培環境になかった学生や園で栽培活動をした経験がない学生は、現在の保育現場での栽培に関する事柄に関心が薄い。食費軽減のためという経済的な理由で取り組む学生もいるが、毎日継続して観察し、愛情をもって育てれば美味しい野菜が収穫できるという楽しみをもって取り組もうとする意欲が見られる。

保育内容環境の「野菜を育てよう」という課題に対して、学生は面倒で不安はあるが、それ以上に面白い課題や楽しい課題、また将来に役立つ課題と捉えていることが明らかになった。

3. 栽培活動の途中経過報告

栽培活動は授業内で実施するのではなく、授業外で各自が自宅で栽培活動を行い、観察記録の記入を義務づけている。栽培活動の途中経過報告は、前期中で2回実施した。方法は、各自の観察日誌(スケッチブック)を用いて(写真1)、栽培状況を報告するものであり授業内に行った(写真2・3)。

(1) 栽培途中での学び(一部抜粋)

- ・接ぎ木苗という言葉を知った。病気に強いと聞いたので購入した。値段は高い。
- ・葉っぱに毛が生えていたり、とげがある。
- ・マリーゴールドと一緒に植えると、防虫効果が期待できる。
- ・脇芽かきや、間引きの時期がわからなかった。ホームセンターの人に聞いて間引いたが、間引いた野菜が食べられるとは思わず、捨ててしまった。あとで、食べられること



写真1 スケッチブック



写真2 発表1回目



写真3 発表2回目

を知った。

- ・毎日、野菜に声をかけるのは恥ずかしいが、名前を呼ぶと返事が返ってくるような気がする。
- ・野菜が抜かれていたので祖母に聞くと、猫か狸が来て、苗を抜いてしまったのかもしれないと言われた。仕方がないので、祖母から野菜苗を分けてもらった。害虫だけでなく、動物にも気をつけないといけないことに気づいた。
- ・きゅうりは、黄色の花の下の方に実がくっついて大きくなることがわかった。この発見で、あまり関心がなかったきゅうりを応援するようになった。

4. レポート記述結果

前期に取り組んだ野菜栽培活動の振り返り

として、課題レポート「野菜栽培を通して学んだこと」を自由記述で求めた。テキスト化したデータ内容を1文章に1つの意味が含まれるように抽出し、記述内容を分析した結果、抽出された記述数は528であった。意味内容の類似性に基づき記述内容を分類した結果、33サブカテゴリー、10カテゴリーに分類された(表2)。(以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉で示す。そこに含まれたコードを「 」で示す)。

【野菜栽培】に関する記述数は76(14.4%)抽出され、〈野菜への愛着〉、〈野菜名〉、〈野菜を育てる楽しさ〉、〈生産者への感謝〉、〈野菜力〉の5サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみ

表2 振り返りレポート記述から抽出されたカテゴリー・サブカテゴリー n=528

カテゴリー	記述数(%)	サブカテゴリー	記述数(%)
野菜栽培	76(14.4%)	1.野菜への愛着	29(5.5%)
		2.野菜名	19(3.6%)
		3.野菜を育てる楽しさ	18(3.4%)
		4.生産者への感謝	6(1.1%)
		5.野菜力	4(0.8%)
栽培管理	74(14.0%)	6.苦勞	32(6.1%)
		7.反省	19(3.6%)
		8.十分な管理・観察	18(3.4%)
		9.継続の重要性	5(0.9%)
感動	73(13.8%)	10.成長する姿	37(7.0%)
		11.結実・収穫の喜び	21(4.0%)
		12.食する喜び	15(2.8%)
栽培知識	64(12.1%)	13.知識不足	27(5.1%)
		14.栽培知識の重要性	23(4.4%)
		15.情報共有	14(2.7%)
子ども	62(11.7%)	16.子どもの栽培体験	25(4.7%)
		17.栽培は子育て	20(3.8%)
		18.食育・教材	17(3.2%)
自己	53(10.0%)	19.栽培苦手	22(4.2%)
		20.過去の栽培経験	17(3.2%)
		21.性格	10(1.9%)
		22.責任感・忍耐	4(0.8%)
保育者として	42(8.0%)	23.保育者としての在り方	19(3.6%)
		24.保育者としての栽培知識	12(2.3%)
		25.保育現場での栽培活動	11(2.1%)
栽培体験	35(6.6%)	26.栽培体験の重要性	17(3.2%)
		27.栽培に対する達成感	10(1.9%)
		28.今後の栽培決意	8(1.5%)
課題	32(6.1%)	29.満足	17(3.2%)
		30.意外・不安	8(1.5%)
		31.栽培理由	7(1.3%)
命	17(3.2%)	32.命の尊さ	14(2.7%)
		33.自然の大切さ	3(0.6%)

ると、〈野菜への愛着〉では、「植物に対して愛着がもてた」「愛情を持って育てるということが大切」など記述数は29（5.5%）であり、愛着や愛情をもって野菜を育てることに関する気づきを記述しているものであった。〈野菜名〉の記述数は19（3.6%）であり、「子どもたちが苦手とする野菜のトップに入っているピーマンを育てた」など自分がどのような野菜を栽培したのか野菜の名前に関する記述をしているものであった。

〈野菜を育てる楽しさ〉では、「育てることの楽しさを感じることができた」「すごく楽しかった」「観察していても楽しかった」など記述数は18（3.4%）であり、栽培は楽しいということを知った・学んだという気づきを記述しているものであった。

〈生産者への感謝〉では、「作る人は大変苦労して作っていることを知った」など記述数は6（1.1%）であり、野菜を作ってくれる人の苦労に気づき感謝の気持ちを記述しているものであった。

〈野菜力〉では、「栽培を全くしていない人が、きゅうすけ（きゅうりの名前）大きくなったねと声をかけてくれた」「食べる皆を笑顔にする。すごい！」など記述数は4（0.8%）であり、野菜には不思議な力があるという気づきを記述しているものであった。

【栽培管理】に関する記述数は74（14.0%）抽出され、〈苦労〉、〈反省〉、〈十分な管理・観察〉、〈継続の重要性〉の4サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈苦労〉では「頑張っ

て育てたが、苦しいときや辛いときがあった」「毎日の観察や世話が大変」など記述数は32（6.1%）であり、毎日世話を

するが大変さや台風などの自然災害への不安があるという気づきを記述しているものであった。

〈十分な管理・観察〉では、「毎日、一生懸命水やりをした」「こまめに様子を見た」など記述数は18（3.4%）であり、水の量に気をつけ痛んでいる葉を取り除くなど、十分な管理や観察を行ったという気づきを記述しているものであった。

〈継続の重要性〉では、「毎日世話することの大切さを実感した」「継続することの大事さを学んだ」など記述数は5（0.9%）であり、栽培するには継続する力が必要という学びを記述しているものであった。

【感動】に関する記述数は73（13.8%）抽出され、〈成長する姿〉、〈結実・収穫の喜び〉、〈食する喜び〉の3サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈成長する姿〉では「日々その姿を変えて、成長しているプロセスに感動した」「思っていたより成長が早くて驚いた」など記述数は37（7.0%）であり、野菜の成長に驚きや発見、感動したという気づきを記述しているものであった。

〈結実・収穫の喜び〉では、「特に最初でできた実を収穫するのがとても印象に残った」「市販のものよりも小ぶりで少ない収穫だったが、自分の手で栽培し生産することで生産の喜びを味わうことができた」など記述数は21（4.0%）であり、小さな実が大きくなり収穫できたという喜びの気づきを記述しているものであった。

〈食する喜び〉では、「家族、近所の方、友人等、たくさんの方に食べて頂いた」「食べるたびにこれが自分で作ったトマトの味かと味わって食べた」など記述数は15（2.8%）であり、他のどんなものより、何倍も美味し

いという気づきを記述しているものであった。

【栽培知識】に関する記述数は64 (12.1%) 抽出され、〈知識不足〉、〈栽培知識の重要性〉、〈情報共有〉の3サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈知識不足〉では「最初の土選びから迷ってしまった」「日ごろ口にする野菜でも栽培方法はほとんど知らない」など記述数は27 (5.1%) であり、自分で栽培しようとしたが何をやる必要があるのかもわからなかったという気づきを記述しているものであった。

〈栽培知識の重要性〉では「観察によって育ち方を詳しく知ることが出来た」「栽培を通して、栽培する環境、気温、水上げの重要性を知ることができた」など記述数は23 (4.4%) であり、知識や技術が自分のものになったという気づきを記述している。

〈情報共有〉では「ホームセンターの人に、沢山質問して育て方を教えて頂いた」「植物そのものだけでなく、育て方の工夫など情報交換した」など記述数は14 (2.7%) である。他の学生の観察日誌の発表を聞いて情報交換したり、身近な人に聞いたりしながら栽培することは大切であるという気づきを記述しているものであった。

【子ども】に関する記述数は62 (11.7%) 抽出され、〈子どもの栽培体験〉、〈栽培は子育て〉、〈食育・教材〉の3サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈子どもの栽培体験〉では「子どもたちに生きる力を伝えることが出来る」「幼児期の飼育や栽培活動の経験から、そういった(命を大切にする)心が育まれている」「野菜の変化を必死になって保育者に報告する姿が頭に浮かぶ」「感性豊かになる」など記述数は25 (4.7%) であり、保育現場

での野菜栽培体験は重要であるという気づきを記述しているものであった。

〈栽培は子育て〉では「野菜を育てると子どもを育てるのは違うようで実は大きな繋がりがある」「手も時間もかかるが決して世話を怠ってはいけない」など25 (4.7%) であり、野菜栽培は子どもを育てるのに似ているという気づきを記述しているものであった。

〈食育・教材〉では、「栽培は、野菜苦手克服の一步になるかもしれない」「新たな刺激をもつのにふさわしい教材である」など記述数は17 (3.2%) であり、子どもたちが食を考えるきっかけとなったり、教材になったりするという気づきを記述しているものであった。

【自己】に関する記述数は53 (10.0%) 抽出され、〈栽培苦手〉、〈過去の栽培経験〉、〈性格〉〈責任感・忍耐〉の4サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈栽培苦手〉では「小さい頃から、植物を育てるのが苦手」「作業する感覚で育てていた」など記述数は22 (4.2%) であり、自分の今までの栽培は上手にできたことはなく内心は苦手であるという気づきを記述しているものであった。

〈過去の栽培経験〉では「野菜を育てるということは小学生のころに少しやったことがあるくらい」「夏休みの宿題で、毎日観察日記をつけるように言われて育てていた」など記述数は17 (3.2%) であり、これまでの栽培経験に関する気づきを記述しているものであった。

〈性格〉では「三日坊主になりがち」「自分とはどちらかというと、すぐに飽きてしまうタイプ」など記述数は10 (1.9%) であり、自分のマイナス面の性格を記述しているものであった。

〈責任感・忍耐〉では「管理が大変だったが、

そのおかげで責任感がより育てられた」「毎日欠かさずに水をあげることでできる忍耐が必要」など記述数4 (0.8%) であり、責任感や忍耐力がついたという気づきを記述しているものであった。

【保育者として】の記述数は42 (8.01%) 抽出され、〈保育者としての在り方〉、〈保育者としての栽培知識〉〈保育現場での栽培活動〉の3サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈保育者としての在り方〉では「愛情を注げば注ぐだけ子どもたちは返してくれる」「保育者として、子どもの成長のためには手抜きとか面倒くさいからやらないなんてことは絶対あってはならないことだと思う」など記述数は19 (3.6%) であり、保育者として子どもを育てるということは責任があるという気づきを記述しているものであった。

〈保育者としての栽培知識〉では「保育者は、野菜の育ち方を知っておかないと、子どもに良い声掛けはできない」「子どもたちと一緒に栽培するとなったら何が必要で何をを用意するのか予め知っておく必要がある」など記述数は12 (2.3%) であり、保育者としての栽培知識は当然必要であるという気づきを記述しているものであった。

〈保育現場での栽培活動〉では「今度は保育者として生き物のすばらしさを感じてもらえるようにしたい」「将来保育士になったら保育園で野菜を育てたい」など記述数は11 (2.1%) であり、保育者として野菜栽培を子どもたちに体験させたいという気づきを記述しているものであった。

【栽培体験】に関する記述数は35 (6.6%) 抽出され、〈栽培体験の重要性〉、〈栽培に対する達成感〉、〈今後の栽培決意〉の3サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈栽培体験

の重要性〉では「この授業で自分が野菜を育ててみて、育てる意味が分かった気がする」「この経験で感じたこと・学んだことはすごく意味のあることだと思う」など記述数は17 (3.2%) であり、自分自身が野菜栽培を体験することは意義があるという気づきを記述しているものであった。

〈栽培に対する達成感〉では「野菜栽培など自分でつくったこそ達成感がある」「野菜の成長している様子を見ることでやりがいを持てる」など記述数は10 (1.9%) であり、最後まで続けることで達成感ややりがいがあるという気づきを記述しているものであった。

〈今後の栽培決意〉では「この機会を通して、枝豆以外のほかの野菜も育ててみたい」「よりよく育つ工夫も、他にあるのか試してみたい」など記述数は8 (1.5%) であり、今後も機会があれば育てたいという気づきを記述しているものであった。

【課題】に関する記述数は32 (6.1%) 抽出され、〈満足〉、〈意外・不安〉、〈栽培理由〉の3サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈満足〉では「今回の授業で、野菜を育てる機会があり本当によい体験だった」「最高の授業だと思った」など記述数は17 (3.2%) であり、真剣に栽培活動に取り組み、多くのことを学んだ貴重な体験だったという気づきを記述しているものであった。

〈意外・不安〉では「大学生になって野菜を育てるとは思ってもみなかった」「野菜を育てることが課題になってしまい、また育てても枯らしてしまうのではないかと不安」など記述数は8 (1.5%) であり、大学生が野菜栽培をするのは意外であり、栽培課題に対しても過去の失敗経験から不安になったという気づきを記述しているものであった。

〈栽培理由〉では「トマトは、あまり失敗しなかったから」「理由は、子どもたちの苦手な野菜のトップに入っているのはピーマンだから」など記述数は7 (1.3%) であり、野菜を選択するのに祖母など家族に相談したり育てやすいものを選んだという理由を述べているものであった。

【命】に関する記述数は14 (2.7%) 抽出され、〈命の尊さ〉、〈自然の大切さ〉、の2サブカテゴリーから構成された。さらにサブカテゴリーを構成するコードをみると、〈命の尊さ〉では「私達が食べているのは命ということを教えてくれた」「(野菜栽培は) 命を育てることなのだ実感した」など記述数は14 (2.7%) であり、野菜栽培は命を育て命をいただいているという気づきを記述しているものであった。

〈自然の大切さ〉では「自然と触れ合うことで自然を大切にする心や、思いやりの気持ちなどを育ててほしい」など記述数は3 (0.6%) であり、野菜栽培は自然が相手であり自然は大切であるという気づきを記述しているものであった。

5. レポート記述結果の考察

野菜栽培活動の実践後の振り返りレポートから分析した結果、記述から分類されたカテゴリーは【野菜栽培】がもっとも多く、次いで【栽培管理】【感動】で上位3つのカテゴリーの記述数の差は少ない。3つのカテゴリーの中でサブカテゴリーの記述数が多いのは【感動】の〈成長する姿〉で、次いで【栽培管理】の〈苦労〉、【野菜栽培】の〈野菜への愛着〉である。このことから、学生は野菜の日々の変化に驚きその〈成長する姿〉に感動するが、頑張っているものの苦しいときや辛いときがあるなど栽培管理には〈苦労〉している。しかし、毎日野菜の世話をする大変さを経験しつつ、野菜を育て

るうちに生き物はすばらしいと感じはじめ、食べるのをためらってしまうほど〈野菜への愛着〉が湧いてきている。小さな苗が成長するプロセスは自分が考えてもいなかった感動があり、苦労はあっても栽培することで、野菜に対して愛着が生まれてくることに気づくことができたと考える。

上位3つのカテゴリーのあとには【栽培知識】【子ども】【自己】と続く。3つのカテゴリーの中でサブカテゴリーの記述数が多いのは【栽培知識】の〈知識不足〉で、次いで【子ども】の〈子どもの栽培体験〉、【栽培知識】の〈知識の重要性〉、【自己】の〈栽培苦手〉、【子ども】の〈栽培=子育て〉である。このことから、苗選びに苦慮し栽培方法も〈知識不足〉で分からないことが多かったが、栽培活動をすることで知識は増え、保育者を目指す学生として当然知っておく必要があるなど〈栽培知識の重要性〉に気づくことができたと言える。また、学生の中には以前から〈栽培は苦手〉で上手く育てた経験はないが、〈栽培は子育て〉と同じで手間も時間もかかるが世話を怠ってはいけないということに気づき、子どもが〈子どもの栽培体験〉をすることにより子どもの感性が豊かになるということに気づくことができたと考える。

残りの4つのカテゴリーの中でサブカテゴリーの記述数が多いのは【保育者として】の〈保育者としての在り方〉で、次いで【栽培体験】の〈栽培体験の重要性〉、【課題】の〈満足〉、【命】の〈命の尊さ〉であった。このことから学生はまだ保育者ではないが保育者の立場になって〈保育者の在り方〉について考えられるようになり、子どもだけでなく学生自身(大人)の〈栽培体験の重要性〉に気づくことができたと考える。さらに、いろいろなことを知らないうちに学べ

る良い体験ができたので栽培課題に〈満足〉し、あらためて私達が食べているのは命であるという〈命の尊さ〉に栽培を通して気づくことができたと言える。

IV. おわりに

本研究は、野菜栽培活動が学生にどのような教育的効果を及ぼしたのかを、保育内容「環境」の野菜栽培活動開始前の質問紙調査と活動終了後の振り返りレポート（字数制限なしの自由記述）により検討した。

栽培活動開始前は、自宅に畑がないなど栽培環境になかった学生や園で栽培活動をした経験がない学生は、栽培に関する事柄に関心が薄く、食費軽減のためという経済的な理由で取り組む学生もいた。しかし、毎日継続して栽培・観察し、愛情かけて美味しい野菜を収穫するという楽しみをもって取り組む意欲があり、栽培課題は面白く楽しい課題、また将来に役立つ課題と捉えていることが示されていた。

活動終了後の振り返りで学生は、野菜の日々の変化に驚き成長する姿に感動するが、継続栽培する大変さと栽培知識不足も重なって栽培への反省が多くなる。これは、小さい頃の栽培体験は自分が主体的に活動するというものではなく部分的・補助的体験であるため、野菜への関心は薄くはないが栽培知識として定着しにくいことが推察される。

また学生は、苦労を実感しつつ野菜を育てるうちに、野菜への愛着が湧き、食する喜びを味わい、栽培の楽しみへと変化する。栽培には手間や時間がかかり子育てと同じであることを観念的に理解するのではなく、栽培体験は保育をめざす学生にとって好ましいことを実体験から言える段階へと移行している。

このような結果から、栽培は子育てと同じという実感や、保育者を目指す学生の栽培体験および子どもの栽培体験の重要性に気づき、保育者を指すものとしての自分の在り方や栽培体験の必要性を認識する教育的効果があることが示された。

学生は、保育者となる前の栽培体験・栽培知識が重要と考えていることから、初等教育学専攻1年生から3年生までの学生が自主的に取り組んでいる「稲作活動」も視野にいれながら授業内容を検討することも今後の課題である。

付記

本研究の調査にご協力いただきました学生の皆様に心より御礼申し上げます。また、データ分析に際しましてご協力をいただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 木田春代・武田文・荒川義名・大久保岩男 (2012). 幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果—北海道某市での調査—, 天使大学紀要, Vol. 13 No. 2, p 1-11
- 村田浩子 (2007). 幼児教育における領域「環境」に関する一考察—保育園での植物の栽培から染色までの取り組み, 畿央大学短期大学部研究紀要, (28), p 31-35
- 細田成子・西島大祐・山根一晃・田川悦子 (2008). 保育職を目指す学生の自然環境に関する意識調査, 日本教育心理学会総会発表論文集 50 (0), p 126
- 草野いづみ (2011). 大学での保育者養成における自然体験授業の効果—保育内容の指導法「環境」の野菜栽培の実践から, 帝京大学文学部教育学科紀要, 36, p 71-78

